
世界を救うものたち

KEI&青 燐道（元、猿渡孝彦）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を救うものたち

【Nコード】

N1330P

【作者名】

KEI & amp ; 青 燐道（元、猿渡孝彦）

【あらすじ】

今回は私ことKEIと青 燐道様（元、猿渡孝彦様）が共に書いていく、

ハリポタの原作沿い二次小説になります。

二人の魔法使いの少年がハリー、ロン、ハーマイオニーたちと共にホグワーツで学び、

共に冒険し、多くの人とふれあい、時には対立しつつも成長し、友情を深めていきながら

強大な敵に挑んでいくというお話になっております。

オリキャラ設定

名前：サクマ・リックロード

性別：男

所属：もち、ぐりふいんどーる

性格：素直。純粹。世話焼き

外見：髪は黒いがちよい赤毛気味。背はさほど高くない。痩せて見えるが着痩せタイプ（筋肉質）。目は黒い。

科目得手：占い学

科目不得手：実技（主に箒飛行）

特技：魔物の本を素手でとっ捕まえる

趣味：月観察

家庭環境：ママ、魔女。パパ、自由人大変。自由奔放な家庭で育った
人格固定：一直線です

独特な癖：困ると指でモミアゲをつまむ。

名前：リユーイ・スネイプ

性別：男（の子？）

所属：なぜかグリフィンドール（父悔しがり）

性格：冷静沈着、だが、時として人を見下す。

外見：黒髪を伸ばし、体は女並みに細い。右目は黒だが左目は…紅
（出来れば魔眼）いつもは魔法かけている片眼鏡をしている。

科目の得手：魔法薬学

不得手：特になし

特技：

趣味：読書

学校入学まで育った家庭環境：母は自分生んですぐに他界。父は親
バカだが教師な為家にはほとんどいない。

それに伴う人格の固定・勉強ばかりこなして寂しさを紛らわせていた。
独特な癖・特になし

prologue

*

昼間の空を、一羽の鳥が行く。白く気高いその鳥。

決して陽のあるうちには飛ばぬその鳥が、手紙を啜えて空を舞う。

「おとうさん、フクロウが飛んでる」

それを見つけた一人の少年は、その鳥が、まさか少年の家の方に向かっているとは思わなかっただろう。

空を行く鳥を見つけた少年の父親は、ポツリと呟いた。

「もうそんな季節か」

この時はまだ、その言葉の意味を知る術は無く、家に帰ってやっ
と理解する。

ポストに投函された、フクロウが届けた手紙。

それは、新たな世界への招待状だった。

Episode 1：ダイアゴン横丁 出会い

フクロウ便で入学許可証をもらった黒髪で細身の少年――リユーイは、一人、ダイアゴン横丁を歩いていた。

「全く…父上も忙しい人だ…仕方ないか」

そう、リユーイの父は学校の仕事が…と言ってリユーイを置いて一時的に

ホグワーツに戻ってしまったのだ。

お金だけリユーイに置いて。

「戻ってくるまでに、買い物をすませておくか…」

いつもの事だ。あの人は息子より学校が大事…と、言い聞かせてリユーイは

リスト片手に店を巡ろうとした。

そのとき、前をよく見ていなかったリユーイは少年とぶつかってしまった。

二人して地面に倒れこんだ。

そう…これが、【サクマ・リックロード】との出会いであった。

「痛てて…。悪いい、荷物が多くて前見てなかった。大丈夫か？」
「…」

ぶつかった相手の髪は、黒に近い赤毛だった。歳も同じ位だろうが、幾分か幼く見える。

リユーイは立ち上がると、汚れた服を払った。

「怪我、してない？」

「大丈夫だ。」

「良かったあ。女の子怪我させたらオヤジに怒られる。」

何か今、大変聞き捨てならない単語が聞こえた。

相手の言葉に父譲りに眉にしわを寄せるリユーイ。

そして相手を見る。

「貴様の目は節穴なのか？ どこをどう見れば僕が女に見える！！」

思わず叫んでしまい、慌てて周りを見る。

周りは何事か、という顔で二人を見ていた。

「…失礼。怒鳴ってしまった…さて？ その格好を見ると今度ホグワーツ入学ということですか？

よければ、我が買物にお付き合いたい願えるとありがたいのだが…

どうやら父もまだ帰ってこぬ様子…一人では勝手が分からぬのでなああ、無理なら構わない」

思わず父似の脅しを使ってしまった…

相手は多分ひくだろうな…

と、改めて後悔するリユーイだったりする。

「別にいいけど。」

「…………え」

予想を裏切り、相手はあっさりと承諾。散らばった荷物を拾い、リユーイに笑いかける。

「じゃ、行こうか。あ、オレ、サクマ。お前は？」

嫌みが効かない上に、馴れ馴れしい。後悔と溜め息。

「…リユーイ。」

「うん、リユーイか。良い名前だ。よし、最初の店に行くぞー！」

入学前から、前途多難である。

サクマと名乗った自分と同じ年に見えない少年に連れまわされリユーイは何とか自分の日常品を買い集めた。

「大丈夫か？」

「…何とか」

笑顔で息も切らさず言うサクマに息を半分切らしながら答えるリユーイ。

その時、二人の目に大男がチラリと映った。

その横の少年にも。

「あれ、親だと思うか？」

「…ただの付き添いだと思うが」

「でも、アイツも多分今年入学じゃないか？」

「…そうかな」

大して興味もないという顔で二人を見ていた。

その時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「リユーイ！！」

「あ、父上だ…サクマも会っていくか。父を紹介したい。まあ、紹

介せずとも後で会うが」

リユーイの言葉に不思議がるサクマだった。

「……………」

リユーイ父を見て、暫く目をパチクリするサクマ。何度もリユーイと父親を見比べる。

そして一言、

「似てるなあ。」

…当たり前だろ。

「親子だからね。」

「リユーイ、この者は？」

威圧感のある、上から目線の声。そこも似てるなと、サクマは思った。

「父上、彼は買い物の手伝いをしてくれたサクマです。」

「そうか、我が息子が世話になった。ところで、君はこの後用事とあるのかね？我々は食事に行くのだがどうだね。ああ、忙しいのなら別に良いのだが。」

遠回しに言っているが、直訳すると、「お前どうせ暇だよな。暇なら飯奢るから来い」。

「暇です。」

「なら付いてきたまえ。」

一同が連れてこられたのは「漏れ鍋」だった。

リユーイ父は、リユーイとサクマを席に案内する。

「好きなものを頼みたまえ」
「はい」

リユーイとサクマの声がかぶりお互いに笑う。
そして注文する。

そこに他の客の話が聞こえてくる。

「さっき、ここにあの、「ハリー・ポッター」が来ていたらしい」
「ハリー・ポッター？」

その名を聞いた時、リユーイ父の眉間にしわが刻まれた。

「…父上？」

「…なんでもない」

（何でもない、という顔ではないが…）

と、思ったが追求しないことにした。

それからしばらくして、リユーイは帰ることになった。

「また…次はホグワーツ行きの列車で」

「ああ…またな」

「では、失礼する」

父に連れられて漏れ鍋を後にするリユーイ。
それをサクマは見送った。

そして…再び、出会ったのである。
今度は列車のホームで。

Episode 2：急行・ホグワーツ行き 再会と有名な子

「あつ、リ्यूーイ!!」

明るい声が駅のホームに響く。

荷物を抱え、リ्यूーイに駆け寄る姿は、正に犬。

「やあ、サクマ。」

「本当に会えたー! 一緒の車両に乗ろうぜ!」

汽車の発車時刻。一緒に列車に乗り込み、席を確保する。

途中、売店の人が菓子売りに来たが、サクマは何故か断固拒否。てつきり買うのかと思っていたリ्यूーイは少し驚いた。

「菓子は嫌いなのか?」

「オレ、こっちの菓子は口に合わないみてえなんだ!」

誰にも苦手なものはあるらしい。

売店の人がいなくなつて、リ्यूーイは読書をはじめた。それをサクマが覗き込む。

「なあ、リ्यूーイ。何読んでんだ?」

「…本」

「見れば判るつて。内容」

「…話しても判らないから、話さない」

そんな話をしていると、見たことのある少年が入って来た。

「あの…他はどこもいっぱいで。ここ、いいかな？」

「…どうする、サクマ？」

「決まってるだろ、いいぜ」

「ありがとう」

サクマがリユーイの隣に座り、少年が反対側に座るのだった。

そういえば、買い物途中で見た気がする。リユーイは本を読みつつ、そう思った。

眼鏡をかけた少年は、何か話をしようか悩んでいるようだ。

「あ、ここ空いてる？」

また増えた。今度は赤毛の少年だ。どんどん人口密度が増えていくが、来る者拒まずの性格なのか、サクマは手招きした。

赤毛の少年を見て、リユーイは本に視線を落としたまま呟くように言う。

「その赤毛…ウィーズリー家のものか？」

「えっ！？ 君、僕の家のこと知ってるの？」

「…ああ、魔法界で有名だろう？」

リユーイはそこで本を閉じ、一同に視線を向ける。

「…僕の名前はロン。ロン・ウィーズリー。よければ、君達の名前を覚えてくれないかな？」

「僕は、リユーイ。ファミリーネームは…驚くから言わないでおう。

そして、こちらはサクマ…そういえば、君のファミリーネーム知ら

なかった」

と、リユーイはサクマを見るのだった。

「あれ？オレ、言つて無かつたつけ？」

「聞いてない。」

「あー忘れてた。そんじゃ改めて自己紹介だな。オレはサクマ・リツクロード。さほど有名でもない魔法使いの長男坊っ！」

「サクマ、誰が皮肉を言えと言つた？」

「へ？」

本人無自覚の皮肉。そして、

「そつえば、そつちのメガネ君」

「め…っ!？」

初対面の相手に、いきなりの失礼発言をするサクマ。こいつ、絶対将来大物になる。（色んな意味で）

「君の名前、聞いてなかった。教えてくれ」

「僕は、ハリー・ポッター」

直後、場の空気が凍った。

「…そうか」

それだけ言つりユーイにハリーが驚く。

「…もつと、驚かれるとおもつたよ、リユーイ」

「驚いて欲しかったのか？ならば、すまない…だが、父が何故かそ

の名を聞くと嫌な顔をするのだ、それに人には言えない事だっただってある。

過去や噂がどうであれ、ハリーは、ハリーだろう？」

「…そうだね」

「…そういえば、サクマ」

「何だ？」

「…僕は、お前を許したつもりはない」

「急に何だ？」

驚いたような顔をしたサクマ。リユーイは半分睨むような顔をする。

「僕はまだ、謝ってもらってない。僕の性別を間違えたこと…」

サクマが口を開こうとしたとき、ハリーが気づく。

「あれ？ そういえば、リユーイ。どうして、片眼鏡してるの？」

「ああ、これは…」

リユーイが説明しようとした時、何分かぶりに戸が開いて、栗色の髪を伸ばした少女が立っていた。

「何ココ。人口密度高いわ。まあ他が空いてないから我慢するしかないわね」

いきなりそこにツッコミ入れた挙げ句、凄く高飛車な発言をしながら入ってきた。

「あら、貴方。ハリー・ポッターね」

しかも見ただけで当てた。

「…人気者は辛いな、ハリー、お互い、頑張ろうではないか」
「えっ？ リューイも…？」

驚くハリーにリューイは「ホグワーツにつけば、僕の苦勞の理由がわかる」とだけ呟く。

そしてリューイは少女に声をかけた。

「僕の名前は、リューイ。そして、こちらがサクマ。そしてあちらがロンです。」

では、レディ。お名前を我らにお教えくださいませんか？」

メンバーの名前を紹介しつつ、あくまでも女性には紳士的な態度を取ろうとしているリューイだった。

それが、この高飛車な少女に通用するのか判らないが。

「あら、リューイ。随分と紳士的なね。でも、名前を聞くより先に、レディに席を譲ったらどう？」

そう来たか。「座れないから、席詰めなさいよ」じゃないのか、女子。

サクマは、ひょいと席を立ち、ドアの近くに寄りかかる。

「ほいよ。女の子には優しくしなきゃな」

「ありがとう」

「…だったら他の所に行けばいいじゃないか」

「あらロン、何か言った？」

「別に…」

それを見て再び少女に名前を聞くリューイ。

「私は、ハーマイオニー。ハーマイオニー・グレンジャーよ」

ハーマイオニーと名乗った少女。

だが、ほかのメンバーには全く興味がなく、ハリーに話し掛ける。

「私、あなたのことが知ってるわ」

ぺらぺらと話し出すハーマイオニーに半分うんざりしていた時、

ロンがハーマイオニーの話しにうんざりし、サクマに見せるように自分のペットに術をかけようとしていた。

それにハーマイオニーが気づく。

「呪文をかけるの？ やって見せてよ」

「あーいいよ…」

ロンは気合を入れて呪文を唱えながら杖を振ったが何も起こらなかった。

ばつが悪そうな顔をロンがしていると、ハーマイオニーが何かに気づいたように杖を取り出し、呪文をかけようとしたが、その前にリユーイがハリーに呪文をかけ、眼鏡を治した。

「これが、したかったのだろう？ ミス・グレンジャー？」

ひそかにハーマイオニーと父譲りの上から目線の言葉で言うリユーイの間に火花が散っていた。

その光景に、ハリー、ロン、サクマの三人はドン引き。
背景に、黒いオーラが立ち上っている気がする。

「美人が凄むと、怖えーな…」

小声でサクマは呟いた。

そして、二人が皮肉を言いながら睨み合う間に、再び来た売店のカートの中身を、ハリーは大金叩いて全て買っていた。

「おいおい…。メガネ君、ソレ全部食うつもりか？」

「サクマもどうぞ」

「うまいよ？」

「要らん」

もうすぐ、終点が近い。

終点が近づき、リユーイはハーマイオニーに声をかけた。

「ミス・グレンジャー！。もうすぐ着く…そろそろ他のコンパートメントに行って

着替えてはいかがかね？」

「言われなくてもそうするわ。リユーイ、あなたとはいい友人になれそうだわ。

またね」

「…ああ」

入ったときとは対照的に笑顔でリユーイに手を振りながら出て行ったのに、

一同はぽかーんとした顔を向けた。

そして一同を見る。

「そろそろ、着替えるか」

「そうだな」

「うん」

着替えたと同時に列車が止まった。一同は荷物を持って列車から降りた。

ハーマイオニーも合流（何故か、リユーイと話が盛り上がる）した。その時、ハリーが見慣れた人物に声をかけ、駆け寄った。

「ハグリッド！！」

「ハリー、それに…ス…」

「それ以上、言うな」

リユーイに黙らされ、ハグリッドは入学生を引率して歩いていく。

ハグリットに導かれ、暗闇を歩いていくと大きな湖、そして遠方には城が見えた。

これから、船に乗ってあの城に向かうらしい。

「うはー、話には聞いてたけど、本当に魔王が居そうな城だな！」
「…どんな話だ」

城を見たサクマが、異様にはしゃいでます。

一年生（イツチ年生）は船に乗り、水面に行く。

漆黒の天空には、数多の星が輝く。サクマはボンヤリと空を眺めながら呟いた。

「…月が、みえない…」

おかしい事をいう。月なら、目線の先にあるではないか。
訝しげにリユーイは、月を指差した。

「なにを言ってる。月ならあそこに」

「ん？オレ何か言った？」

無意識だったらしい。

Episode 3：ホグワーツ？ 組み分け帽子と有名人

一同がハグリッドに引率されて城の中に入ると一人の女性の魔女が待っていた。

「マクゴナガル教授、イッチ（一）年生の皆さんです」

「ご苦労さま、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

マクゴナガルとハグリッドに呼ばれた魔女が説明しようとした時、少年が飛び出してきた。そして、目の前のかえるを捕まえた。だが、マクゴナガルに睨まれる。そんなとき…

「やあ、君がハリー・ポッターかい？」

ハリーに話しかけてきたのはオールバックの少年だった。

そして、ロンをちらりと見る。それから再びハリーに視線を戻す。

「僕はドラコ・マルフォイ。君とはいい友人になれそうだ」

「そこまでにしてもらえるか、ミスター、マルフォイ？ ハリーの友人はハリー自身が決めることだ」

「お前は…リユイー!!」

「おい、止めるよ。二人とも」

ハリーの前に庇うように立ち、マルフォイをにらみつけるリユイーと、それを止めようとするサクマ。

火花を散らす二人にマクゴナガルはため息つきそうなイメージだった。

「あのデコ、リ्यूイの事知ってるんだな。有名なんだな、リ्यूイもメガネも」

デコとはマルフォイの事であろう。

どうやら、名前を覚える気は無いらしい。

組み分けの儀式。新入生達を四つの寮に分けるもの。話によると、帽子が組み分けするらしい。

リ्यूイはサクマに小声で説明する。

「僕が有名なんじゃないくて、僕の父が有名なだけ…そうだ。僕の名前が呼ばれるときあたりを見ても。面白いことが起きるからな」
「面白いこと？」

だが、サクマの問いにリ्यूイは答えず、一同について行く。
大広間につくと全校生徒視線が注がれていた。

「リ्यूイ。あそこ…お前の父さんじゃね？」

「ああ」

「えっ、リ्यूイのお父さんって、ホグワーツの教師なの!？」

「…こういう反応あるから言いたくなかったんだ。後で話す」

そんな話をしていると次々と新入生の名前が呼ばれていった。

ロンとハーマイオニーも呼ばれ、小汚い帽子と言う名の組み分け帽子（何気に酷い）を被らされ共にグリフィンドールになり、寮の席に歩いていった。

グリフィンドールは勇敢なる者、スリザリンは狡猾なる者、レイブンクローは賢き者、そしてハッフルパフは忠実なる者（別名、劣等

なる者)。

寮ごとにそういう意味が存在すると、リユーイはサクマに言った。それぞれの人材に合わせ、帽子が分けている。

「そうになるとオレ、ハッフルパフあたりに行きそう」

「何でだい？」

「…他が当てはまらねえ…」

そう言った直後に、サクマの名前が呼ばれた。緊張しながら、組み分け帽子を被る。

サクマは組み分け帽子と二言三言何かを交わし
(一同には聞こえないため、内容が分からない)
組み分け帽子は高々と「グリフィンドール！」と叫んだ。

「オレ、グリフィンドールになるとは思わなかった」

と、呟きながらリユーイのよこを通っていく。

「サクマー!!」

「同じ寮でよかったね!!」

「ロンに、ハーマイオニーに、メガネ君」

ハリーたちもサクマが同じ寮で喜んでいた。

サクマも喜んでいたが、リユーイがどの寮になるか興味があるよう
で、

ハリーたちと共に見守っていた。

遂に帽子を被る時が来た。

リユーイの名前が呼ばれた瞬間、全校生徒が静まり返る。

「え？リユーイ・スネイプって」

「お、おいまさか…」

「聞き間違い、じゃないわよね？」

聞き間違いではない。全員があのだ教師と息子を見る。

多分、ハリー登場並みのざわめきだろう。

それに構わず、リユーイは組み分け帽子に命運を任せる。

きっとスリザリンだな。誰もがそう思っていたが、帽子が下した答えは、

「グリフィンドール！！」

全校生徒どころか、本人もお父さんもびっくり！

リユーイは父のほうを見、「ごめんなさい」といように頭を下げてから

サクマたちのほうに行って座った。

「リユーイも一緒の寮だな…ってめちやくちや他寮（特に教師席とスリザリン）

からの視線が…」

「だから、言っただろ？ 面白いことが起きるって」

「もしかして…リユーイがファミリーネームを名乗るの渋っていたのはこういう理由だったの？」

反対側のハーマイオニーがリユーイに聞いてきた。

「…ああ。騒がれたくないんだがな…」

軽くため息をついているリ्यूイの反対側でロンはゴーストと話をしていた。

とハリーが教師席を見た後頭を押さえていた。

「どうした、メガネ君？痛むのか？ リ्यूイ、メガネ君の様子がおかしい」

「ハリー、どうした？ 教師席に何・・・が…ッ！」

「リ्यूイもか！？」

ハリーとリ्यूイの異変に気づいたのはサクマだけだった。

慌てたサクマは、何かを思い出したかのように、ハリーの額、そしてリ्यूイの眉毛ら辺を撫でた。
痛みが僅かだが引く。

「リックロード家奥義・痛い痛い痛い飛んでいけ」

流石にポカンとなる二人。

「いや、お前の方がイタイぞ、サクマ」

「????」

リ्यूイはハリーのほうを見た。

「ハリー、どうした？」

「うん…あそこでクイレル先生と話している人を見たら…ちょっとね」

「ハリーはあの先生のことを知っているのか…その隣？」

ハリーの目線のほうをみると…

「アレ、リ्यूイの父さんじゃね？」

「え！？」

サクマの答えに驚くハリー。

「ああ。父だ。魔法薬学を教えている」

そこに監督生のパーシーが口を挟んできた。

「リ्यूイには悪いけど、本当はクィレル先生の席を狙っているってみんなが噂しているよ。闇の魔術にとっても詳しいんだ」

ハリーがパーシーに聞きつつ、スネイプ先生を見ていたが、本人はハリーではなく近くのリ्यूイを見ていた。そのうちにダンブルドア校長の話が始まった。

Episode 4：ホグワーツ？

「おめでとう！ホグワーツの新入生、おめでとう！歓迎会を始める前に、二言、三言、言わせていただきたい。では、いきまずぞ。それ！わっしょい！こらしょい！どっこらしょい！以上！」

ダンブルドアの発言に、サクマは額をテーブルにぶつける。

「な、なんだそりゃ！どこからツツコミ入れれば良い！？」

「食事をした後で、存分にツツコミしてくれば？」

目の前に、突然現れたご馳走。ロン、既に食べてます。

リユーイはサクマをちらつと見た後、ハーマイオニーと何事か話しながら食べていた。

（リユーイとハーマイオニー、ずいぶん仲良くなったな…）

と、サクマは思いつつ、食べ始める。

しばらくして再びダンブルドアの話が始まる。

「一年生に注意しておくが、構内にある森には入ってはいけません。そして…今年いっぱい四階の右側の廊下に入ってはいけません」

ハリーは笑っていたが、リユーイもサクマも笑っていなかった。

そして、就寝時間になり、監督生のパーシーに続いて大広間から一同は出るのだった。

寮に行く途中、ポルターガイストのピーブスが現れるが、パーシー

に怒鳴られ、何処かへ去っていく。

リユーイの隣で、ハリーが何度目かの欠伸をした。

「ロン、見てみい。メガネ君、眠そうだぜ」

「サクマ、君も目が据わってるよ？」

サクマの顔をみて、ロンが言う。にやりとサクマは笑った。

「…寝ていい？」

「ダメ」

しばらくして、パーシーが絵画に向かって合言葉を呟き、開いた穴から談話室に入る一同。

（サクマは半分寝かけていたのでリユーイが支えた）

「おい、サクマ。もうすぐ寝室につくから…寝るな」

「…悪い…眠い…」

そんな会話を繰り返しながらリユーイはサクマを半ば引きずって寝室に来て

ひとつのベッドにサクマを放り込んだ。

さて、全員が寝静まり、リユーイも寝ようとした時だ。ハリーが唸っている事に気付く。どうやら、うなされているようだ。

「…スリザリンには行きたくない…」

… どんだけスリザリン嫌なんだよ。

内心、そんな突っ込みを入れ、リユーイも眠りに落ちた。こうして、長い一日が終わった。

Episode 5：ホグワーツ？

翌朝、寮からでた一同に、他の生徒からのささやき声が聞こえてきた。

「見てみて」

「どこ？」

「赤毛ののつぽの隣とその隣」

「メガネをかけてる奴？」

生徒の噂話に少しげっそりしているリユーイにサクマが心配そうな顔で声をかける。

「大丈夫か、リユーイ？ 朝からげっそりしてるけど」

「…噂が広まるの早すぎだろう…ハリーはともかく、何故…」

「あゝメガネ君は有名だからな…」

「でも…これじゃあ、教室探すの大変だね…」

リユーイとロンに挟まれながら歩いていたハリーもため息をついた。

ホグワーツの階段や扉は、動いたり、消えたりと特殊なものが多く、尚且つゴーストまで邪魔をしてくる。

誰だ、こんな学校作ったのは。

サクマがボヤいた。

1日目から、不運に見舞われた。間違えて四階の立ち入り禁止区域

に着いてしまい、更に不幸な事に、それをフィルチに見つかつた。道に迷つたと説明しても信じて貰えず、挙げ句地下牢に閉じ込めると脅され、焦るハリー達。

ちようど通りがかつたクイレル先生がフォローにはいらなかつたら、全員地下牢行きだつただろう。

サクマがボヤくすぐ傍で今度はハリーが今までの授業を思い出しげつそりしていた。

どうやらハリーは「魔法とは、ただ杖をふつておかしなまじないを言うだけ」

と思つていたらしい。

水曜日の真夜中には望遠鏡で夜空を観察して星の動きなどを勉強した。

週三回は「薬草学」を学んだ。

ハリー曰く一番退屈なのはゴーストが教える「魔法史」だつたらしい。

（と、皆は後でハリーから聞いた）

妖精の魔法のフリットウィック先生の授業でも一波乱。

積み上げた本の上で出席を取つていたフリットウィック先生は、ハリーの名前で興奮のあまり転んで見えなくなつた。

「あれ？先生見えなくなつた！！」

それを見ていたサクマが、不謹慎なまでに大爆笑したのは言うまでもない。

再開のお知らせ

この作品を読んでいただいている皆様へ。

作者たちの都合により一旦中断しておりましたこの作品ですが、復帰することが決定いたしましたのでお知らせしたいと思います。

ただ、決定しただけで「いつ続くか」などということは決まっておりません。
相方とじっくり話を練りながら一歩ずつゆっくりとスローペースで進めて行きたいと思っております。

この作品を楽しむにしている方がいらっしやいましたらどのくらいになるか分かりませんが
お待ちいただけると大変ありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1330p/>

世界を救うものたち

2011年10月7日09時44分発行